



「災害の軽減に貢献するための 地震火山観測研究計画」への参画

奈良文化財研究所では、今年度から「考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構築・公開」という、新規事業に取り組み始めました。2018年度までの予定で計画を進めています。

ご存知のように、2011年の東日本大震災では、これまで経験したことの無いような大地震と大津波により、甚大な被害を受けました。これが直接の契機となり、低頻度で発生する大規模な地震や火山噴火、それらにともなう様々な現象が引き起こす災害に備えるために、古地震や古津波等、災害現象についての歴史的な調査・研究が必要であると強く再認識されるようになりました。

文部科学省に設置されている科学技術・学術審議会では、そうした点をふまえて、標題のような計画を建議しました。この建議に沿って審議会の測地学分科会・地震火山部会・次期計画検討委員会が2014年度から2018年度までの研究計画を定めました。この計画の中で、低頻度で発生する大規模な地震・火山噴火現象を解明する上で、歴史資料や考古・地質学的痕跡等のデータを収集・調査・分析することの重要性が指摘されました。また、その結果を



災害痕跡（噴砂）の考古・地質学的調査

データベースにして公開・活用する必要性も述べられています。

従来、地震や火山噴火の予知に関する研究計画は、全国の大学や関係機関からなる「地震・火山噴火予知研究協議会」が協力・連携して推進してきました。そして、新たな建議と研究計画をふまえて、2013年8月に、この予知研究協議会から奈文研に対して、協議会のなかに新設される「史料・考古部会」への参加要請がありました。従来の自然科学系部会主体の協議会に、人文・社会科学系部会が加わることになったのです。

この史料・考古部会は、地震・火山噴火に関する近代的な観測データが整う前の資料を収集・調査・分析・活用し、低頻度で発生する大規模な地震や災害現象等の理解・解明に資することが、その役割となっています。部会には東京大学史料編纂所と奈文研が参加しており、編纂所は近世史料の地震に関するデータベース構築・公開を、奈文研は災害痕跡の考古・地質学的データの収集とデータベース構築・公開を担います。そして、両者のデータとともに、編纂所が既に構築した古代・中世地震・噴火史料データベースもあわせて、総合的な研究・活用を推進しようとしています。

奈文研では、埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室が担当します。さらに、研究支援推進部連携推進課、企画調整部文化財情報研究室、都城発掘調査部史料研究室、埋文センターの保存修復科学・環境考古学・年代学研究室の各課・室が協力・連携して、全所的な体制で取り組んでいます。

事業は緒に就いたばかりで、基礎的なデータ収集をしているところです。それでも、今年中には簡単なデータベースのイメージを構築するところまで漕ぎ着けられるよう、作業を進めたいと考えています。皆様のご支援・ご協力をお願いいたします。

（埋蔵文化財センター 小池 伸彦）